



パック連通信

No.104 2016年1月10日発行

全国牛乳パックの
再利用を考える連絡会

事務局：東京都中野区東中野 4-6-7 東中野パレスマンション 201 TEL03-3360-1098

おかげさまで 30 周年

全国パック連30周年記念集会特集

昨年 10 月 15 日、中野サンプラザにおいて全国パック連 30 周年第 1 部で記念集会、第 2 部で祝う会と銘打ってパーティを開催しました。懐かしい顔、いつもご参加いただく方、新しい方など延べ 120 名の参加をいただきました。第 1 部の記念集会ではパネルディスカッションを行い、30 年以上活動を継続しておられる団体の代表に、活動の紹介、パック連の思い出など語っていただきました。さすが活動実績と共に人生を積み重ねてこられた方々のお話には厚みがあり、時間が足りないほどでした。参加者からも大変好評をいただきましたので、ダイジェスト版として、各パネラーのお話をお伝えいたします。



全国パック連 30 周年記念集会の開会セレモニーでは、主催者あいさつに続いて、全国牛乳容器環境協議会の岸田一男会長と、韓国乳加工技術院の李満宰代表より、来賓のご挨拶をいただき、そののちパネルディスカッションに入りました。

「30 年以上続く活動団体の今・昔と

牛乳パック再利用運動」

藤田 和芳 氏 (株) 大地を守る会代表取締役

安全な物を食べたい、安全な物を作りたい

農薬や化学肥料を使わない農産物を全国の農家の

人達に作ってもらって、それを都市の消費者の玄関先まで宅配するというビジネスを行っております。同時に私達は、この環境問題とか、農業の問題にも積極的に関わりたいという気持ちがありまして、事業と共に運動も一緒にやってきて、今年で 40 周年を迎えます。現在契約している農家の人達は、全国で約 2,500 人ほど。会員制で、常時商品を買っていただいている方は、関東を中心に 10 万世帯の人達が会員として登録。インターネットのユーザー登録は 14 万人となっております。

日本の農産業を守ろうとか、原発やめようよとか、あるいは、食料の自給率を高めようという運動も消費者の人達と一緒にやりながら、事業を展開しています。

安全、安心な農産物の流通以外にも、会員の不要衣類を回収し、日本ファイバーリサイクル連帯協議会を通じて、パキスタンのカラチに送り、現地の市場での販売によって現金化し、スラム地区の学校の運営資金にあてている活動もしています。また最近力を入れておりますのは、2 年ほど前から中国の北京で、日本での事業と同じ事業を開始しました。中国の農民たちが作る有機無農薬の野菜を、



中国の北京の消費者の玄関先まで宅配するという事業を立ち上げています。

日本の第一産業を守りたい

食べ物が無くなり、食料危機のようなものが来ればこの国の行く末が大変心配です。どんなに立派な自動車があっても、優れたコンピュータがあっても、食べ物が無くなれば私達の生命も脅かされますし、気持ちも沈み、異質なものになっていくという意味で、私が最近思っているのは、食料自給率を高め、日本の農業を何としても守りたいと思っております。今の政権やあるいは社会が向かっている方向は、例えば TPP のように、全ての関税をゼロにしながらか海外から安い農産物が洪水のように入ってくる状況でありますので、その中でどうやって日本の農業を守っていくかというところが私の最大の関心です。そのために消費者の人達の力を借りたい、特に日本の食品産業に関わっている企業にも、海外の農産物に依存するのではなく、国産の日本の農家の人たちが作った物を活用しながら日本の農業の、食料の生産基幹をしっかり次の世代に繋ぐという事を、是非やっていただきたい。私たちもその為に力を尽くしたいと思っております。原発の問題や遺伝子組み換えの問題とか、私ども事業にかかわる問題はいっぱいあるわけですが、そういう観点でも事業を通じながら社会に訴えていきたいと思っております。

パック連について申し上げますと、30年続いた一つの要因は、牛乳パックの回収から始まり、そこに留まらず、華麗な変身を次々に遂げていったことです。紙漉きをするとか、最初は消費者団体とか生協とかに働きかけて、さらに全国の福祉事業所に声を掛けていくとか、小学校でも回収するとか、スーパーマーケットでも回収するという風に、華麗に運動の幅を変えていったことが、一つの大きな成果であり、一つの力であると思っております。

山本 耕平 氏 (株) ガイックス都市環境研究所代表 ゴミ・リサイクル・環境の制度化を手がけ31年

私の会社はこの10月で31年を迎えます。主にコンサルタントという形で自治体の計画作成、調査、あるいは環境省の仕事なども行ってきました。思い起こせば30年前、前代表の平井初美さんとお会いして、大月で開催されました第1回の大会に、お亡くなりになった早稲田大学の恩師、寄本先生に誘わ

れて行ったのが最初だったと思います。当時は、ゴミ問題そのものがそんなに制度化されてなく、リサイクルという言葉など見向きもされない時代で、色々な事を手探りでやっておりました。使い捨て容器が増えていく中、特に問題だったのが空き缶とか空き瓶で、先進的な自治体が分別収集を始めたのを機に、資源化研究会とか自治体の現場の職員、あるいはリサイクル業者さんとか、現場で汗をかいている人達が集まり、一緒にリサイクルの仕組みを模索していました。その中で、突如、牛乳パックというのが出まして、その頃古紙業界では禁忌品で混ぜてはいけないものだと、明確に言われていて、牛乳パックだけ集める、集めても持って行く先が無かった。リサイクルルートを確立するために大変なご苦労をされていて、全国でそういう運動を広めようということで、第1回の大会が開かれ、お邪魔しました。

その後も、平井初美さんが東京に来られると私の事務所に寄られて、多分、霞ヶ関が近かったからだろうと思いますが、各省へ色々回ったけど手応えなしで、厚生省なんか中々認知してくれない。確か3回目の大阪大会の時に、国の後援を取ったと思いますが、その後援をもらおうと、一生懸命働きかけをしてました。そんな折、経済企画庁の方で、省資源省エネルギーという運動の中でリサイクルを取り上げようという審議会がありました。私は委員でしたので、牛乳パックの運動を支援しましょうと、当時の担当室長さんにお話をし、経済企画庁がまず後援をして、そこから色々働きかけをしていただきました。とにかく国に認知してもらうために苦労をされていたのを良く記憶しています。それからスーパーで店頭回収が始まり、そういう意味で言うと牛乳パックは、市民が始めたリサイクルで、市民がルートを開拓して、回収システムも市民が提案して事業者と共同で作ったという、他の容器包装とは全く違うアプローチで作られた仕組みであって、それが多分、特筆すべき事でありまして、大変な取り組みをされていたわけでありまして。

僕らも若い頃で、NPC とか言ってノープロフィット



トカンパニーですから、お金もなく勢いで、代々木公園でエコロジカルフェスティバルなど、今は名古屋大学の先生になっている、環境省の若手の職員とつるんで色んなイベントをやったりしてました。段々、環境に関する制度が整ってきて現在に至るという事であります。今は容器包装リサイクルに関する「容器包装 3R 推進フォーラム」を開催したり、個人的には年に1回くらいベトナムに行って、ゴミを分別するとか、ベトナムの皆さんにゴミ家計簿をつけてもらうとか、日本の経験を海外に伝える、そんな事も関心があってやっております。

自治体に対してもっとアピールが必要では

制度が整いシステムが出来上がって落ち着いても、実際は連続とリサイクルも続けてやっていかなきゃいけないので、継続して発展していくにはもう少し行政の力を我々は借りる、行政の力を使うというくらいが必要かと思えます。パック連の活動というのは、環境教育とか福祉とか色んな所に繋がっている活動なので、その精神は他のものにはない、それ自体がこの運動の面白さです。こういう活動に参加する事の面白さを、もっと自治体の方に知ってもらって仲間になっていただき、まさに牛乳パックを通して、民間との色んな連携の仕方を学んでもらうとか、もっとアピールして欲しいと思えます。

萩原 喜之 氏 NPO 法人中部リサイクル運動市民の会 パック連はバナナボートの落とし子

パック連はいろんな人に支えられたプラットホーム、だから 30 年やって来たのかなと。今後も利害をこえた繋がりでのプラットホームであってほしいと思えますが、パック連の話をするのならこれを言わなければならないと思えます。1986 年 10 月 5 日、



「バナナボート」に全国の市民団体 170 団体、510 人が乗り込み、仲の良い人悪い人も含めて、業界も様々、ジャンルも様々、船の中は草の根サミットという言い方してましたが、6 日間ほとんど寝れないくらい喧嘩ばかりしてました。南西諸島に出掛けて、帰りに船の中でこれからどうするという議論をしていたんですが、パック連のネットワークはそれが終

わって産み落とされたものと私は認識しています。もうひとつ、オルタナティブトレードジャパンというバナナボートを切っ掛けに、フェアトレード、バナナの輸入。最初は砂糖でしたけれども、黒砂糖、マスコバド糖、そういうものが生まれた。ここにおられる藤田さんやグリーンコープの行岡さんはかなり大きな組織で体力ありましたから、そこが呼び掛けてくれて色んなジャンルの人達が集まって、新しいものを生み出したり支えてきた。本当はこういうことが一番日本に大切なんだと、まだまだ行岡さんも藤田さんも満足せずに支えてほしいんですけど、今日本の状況は大変良くないので、やはり新しい社会にふさわしい新しい社会を支えるのは、先輩方に支えていただくしかないと思います。

最近僕が何をやっているかという事ですが、中部リサイクル運動市民の会の立ち上げは、1980 年 35 年前になりますけれども、つい 6 年前に初めて山間地の活動、過疎地の活動に携わることがあって、僕なりにずっと街のゴミの話をしてきました。高度成長で公害も含めて、環境を壊したからそれをなんとかしよう。でも考えを変えました。高度成長で壊したものというのは、地域や人のつながり、そして心を失ったという。皆不安だという、特に都市生活者の不安というのは大きいです。それで、パック連の運動というのは、回収運動ではない、回収というのは手段、道具であったというふうに認識しておりますが、初美さんが最初の頃言っていた、子供達にお父さんお母さんが牛乳パックの回収をやったり物を大事にするその背中を見せて、未来を背負う子供達に希望や方向を示すんだと。今で言う環境教育というか、それよりも少し深かったと思えます。僕が 6 年前に気がつき始めた「つながり」とか「心」というものを、パック連の初美さんは最初から持っていたんだろうなと、30 年というこの節目であえて言わせていただきます。

私がこの心やつながりに気付いたときに、益々地域にこだわりを持ちました。地域がどうなれば良いか、例えば食、地域で基本は賄えることを目指す。次にエネルギー。次にうちの父親と母親が 93 と 91 になりまして二人を 63 の私が一人っ子なものですから介護しているわけですが、この介護という問題を軸に、特に東日本大震災があって福島原発事故の時、私は静岡の出身で浜岡原発から 13km 地点で

すので、我が身の問題があるんですね。地域のエネルギーを何とかしようと。僕は反対運動とはちょっと違う世代で、提案運動ということで、来年から電気を選べる状態がくるので、原発止めようではなくて、私達はどんな電気を使うか、今一番一生懸命やっている事です。

これからは本物が残る

ごみ問題が一息ついて次のトレンドは CO2 削減ですが国の方向性が決まらず、自治体も動けない。NPO も匂は無くなりました。でも、環境と NPO の役割が消えたわけではなく、上辺のアクセサリーとしての環境、アクセサリーとしての NPO 活動が無くなっただけで、僕はやり易くなった。本物しか残れなくなった。国から補助金がでるから、地方自治体から補助金が出るから環境云々ということはないと思います。

村上 悟氏 NPO 法人 碧いびわ湖代表理事 原点は琵琶湖のせっけん運動

碧いびわ湖という団体は滋賀県環境生活協同組合を 2008 年、7 年前に NPO に改装しまして、今私たちの拠点になっています。原点は琵琶湖の石鹼運動にあります。1977 年に琵琶湖で赤潮が発生し、原因が合成洗剤だったことから、石鹼に切り替えていこうという運動が起こるわけです。単に石鹼に切り替えるという事に留まらず、琵琶湖を汚している廃油を自分達で集めて、これを原料に石鹼にしようという、リサイクル石鹼運動を始めました。それで牛乳パックのリサイクルに繋がっていく訳ですけども、その時からずっと大事にしている事が 3 つあります。



与えられているもの、安いものにただ飛び付くのではなくて、自分達でよく考えてどういうものを作ったら良いのか、また作れる物は自分達で作っていきましょうというのが一つ。二つ目は、力を寄せ合ってやりましょう。これはもともと協同組合としてスタートしているという事もあるんですけどもここを大事にしています。それからもう一つは、もったいない精神。今まで捨ててきた物を活かそう、足元にある物も使えるんじゃないの、という精神で色

んな事業活動をっております。

まさにこの 3 点は、牛乳パックのリサイクルに全く合致したものでありまして、これが 1990 年から私達は取り組みをして 25 年になるわけですけど現在に至ります。

私共は事業型の NPO で、主に 3 つ程仕事しております。一つは、生協時代から続いている共同購入。私も運営委員としてかかわっております団体、関西ミルクロードのオリジナルブランド「おかえりティッシュ」「ただいまロール」といった牛乳パックの再生品も含めて、石鹼や地域のお米、菜種油、こうした物のお届けをしています。それからこれに関連してのリサイクル事業。廃油、牛乳パックの回収。牛乳パックに関しては地域のスーパー、行政、福祉施設、幼稚園等々、約 100 ヶ所回収先がありまして、年間 350 トンくらいの回収をしています。

もう一つの柱が、住まい作り。住宅の中で毎日使う水とかエネルギーの使い方を変えていくという事で、例えば雨水を使う住宅とか、あるいは、太陽熱利用、あるいは、地域の工務店さんと組んで地域の木を活かしていくという住まい造りをしております。

捨てているものは実は素敵な良いもの

雨水利用ですが、最初は省エネとか防災とかの視点から始めたんですけども、実は雨水を溜めると意外と綺麗で、もともと蒸留水なのでとても石鹼との相性が良くて、石鹼カスが出来にくいという事を知りまして、数年前から住宅の中に 2 トンとか 3 トンとかのタンクを入れて、洗濯に使うという設計をしています。大変好評で、10 件以上は工事をやらせていただいております。改めて思ったことは、最初は洗うとかトイレとかだったら、雨水で良いだろうと始めましたが、やってみれば雨水が良いじゃないかという形になるんです。

牛乳パックもそれと同じで、僕も知らないうちは、とりあえずゴミにならない程度と思っていましたが、容環協さんがいつも情報発信されているように、とても良いものなんです。それがなかなか皆に伝わりきってなくて、捨てようとしている物は、実はとても素敵な良いものなんだ、大事な物なんだという事に気付いてもらえるよう、この辺りを上手く伝えていけば、皆の意思が変わっていくのではないかと。地域の NPO を活かして、協働していくと良いのではないかと思います。